



研究奨励事業
研究報告

松本清張とラオス
——ベトナム戦争の記述をめぐる研究——

日本大学・早稲田大学非常勤講師 尾崎 名津子

北九州市立
松本清張記念館

第十六回松本清張研究奨励事業

松本清張とラオス——ベトナム戦争の記述をめぐる研究——

日本大学・早稲田大学非常勤講師 尾崎 名津子

目次

一	はじめに	3
二	調査・研究の意図と方法	3
三	ベトナム戦争と戦後日本社会	4
四	戦争とジャーナリズム——開高健『輝ける闇』との比較から『象の白い脚』を分析する	7
五	松本清張の作為と発言	17
六	まとめ	19
	参考文献	
	参考資料1 松本清張とベトナム戦争 関連文献	23
	参考資料2 松本清張とベトナム戦争 年表	25
	参考文献一覧	28

一 はじめに

本稿は二〇一四年六月十七日の決定通知から二〇一五年六月三十日まで実施した、第十六回松本清張研究奨励事業の入選企画「松本清張とラオス——ベトナム戦争の記述をめぐる研究」の成果報告である。

成果は本報告書のほか、松本清張研究会第三二回研究発表会（二〇一五年六月六日、於東京学芸大学）にて「松本清張とラオス——ベトナム戦争の記述めぐって」と題した口頭発表が挙げられる。

二 調査・研究の意図と方法

研究の目標は、『象の白い脚』（別冊文藝春秋、一九六九年八月〜七〇年八月）の原稿・ゲラや所蔵資料の調査と、作品の内容分析を中心として、松本清張がベトナム戦争といかなる関わり方を選択したのか、また、ベトナム戦争に対する言及やその虚構化の際の特質はいかなるものだったのかという各点を意味づけることにある。さらに、「ベトナムに平和を——市民連合（以下ベ平連）の中心的な存在だった小田実や、『夏の闇』輝ける闇」などを通してベトナム戦争体験を自己の作品の主要テーマに据えた開高健など、他の同時代の作家たちの社会的な実践や創作と比較、検討することで、松本清張の独自性を明らかにすることを目指した。

本研究は以下の問題意識に基づいている。

まず、ベトナム戦争とは日本人にとって決して対岸の火事ではなかった。それは日本がアメリカにとってアジアにおける後方基地として在ることを否応

なく想起させ、沖縄問題と結びつくかたちで国民の熱い関心の的となった。さらに、インドシナ地域での戦闘という点で、ベトナム戦争はアジア太平洋戦争と相似関係にあり、岸信介内閣が南ベトナム政権に補償を行った事実、政治的マターである以上に国家としての日本がアジアと関わる場合の一つの構えを知らしめた。すなわち、ベトナム戦争とは戦後の日本人自身を映す鏡だったのである。ベトナム戦争の終結から四十年が経った今、史的事実となりつつあるその戦争から、戦後の日本を逆照射する考察がより多くなされてもよいのではないだろうか。

次に、先述のとおり、日本の作家たちが社会的な実践を繰り広げたことも、ベトナム戦争期の特色の一つだろう。だが、その活動の文学史的な位置づけは未だなされていない。

そのような社会的、文学的状况下で、松本清張の位置は特異である。ベ平連の反戦広告に際しては呼びかけの一人として名を連ねたものの、管見の限りでは運動自体に対する積極的な関与の跡が見出せない。そして、ファン・パン・ドン首相との歴史的な単独会見を実現したが、そのことはルポとして日本に「報告」されるものの、彼の小説テクストに直接的には反映されていない。何より特異に見えるのは、松本清張がベトナム戦争に如上の形で関与しながらも、その創作においてはベトナムという土地自体を描かなかったことである。その代わりに組上に載せられたのはラオスだった。

ベトナム戦争期のラオスを舞台にした小説『象の白い脚』について、単独で論じているのは綾目広治「阿片と頽廃とCIAのラオス——『象の白い脚』」（『松本清張研究2011 第十二号』北九州市立松本清張記念館、二〇一二年三月三十一日）のみである。綾目氏は清張の日記と作中の記述が重なることを実証的に指摘し、この作品を「ノンフィクション・ノベル」として位置づけている。史的事

実と作品内容を丹念につき合わせつつ、CIAの謀略を暴くという物語のモチーフが「日本の黒い霧」とも通底していることを明らかにしたことは卓見である。

また、ベトナム戦争と清張というテーマに基づく論考としては、浅井泰範「考察・松本清張は「超ジャーナリスト」である」(『松本清張研究2011 第十二号』北九州市立松本清張記念館、二〇一一年三月三十一日)がある。浅井氏は清張本人との交流を回顧しつつ、その徹底した取材姿勢の実態を明らかにしている。その上で、清張が「ジャーナリストの責務、資質、条件などのすべてにおいて」「桁はずれの実績を」示したと論じる。しかし、これらの論考を参照してもなお、「なぜベトナムを描かずにラオスを選択したのか」という疑問が残る。

これら二論に共通するのは、清張作品のジャーナリズム的側面の指摘である。だが、そうであるとはいえ、ベトナム戦争を媒介に清張が描出しようとしたものは、「報道的な意味合いの強い物語」として単純化できないのではないだろうか。

本研究では、以上の問題意識や先行研究の状況に基づき、松本清張がベトナム戦争をどのようなものとして受け止め、表象しようとしたのかを明らかにすることを目指した。『象の白い脚』という形でベトナム戦争を創作として描くにあたり、ベトナムではなくラオスを選択したことには、清張自身がハノイ入りの前にビエンチャンで足止めされたという史的事実以上の意味があると考えている。こうした方策は、他の同時代の作家たちと比べると非常に特異に映るが、それは創作の素材の面で特異だというだけではない内容を含んでいる。ラオスと清張との関係を問うことは、清張の同時代との関わり方それ自体のオリジナリティを立証することに繋がると思われる。

また、「ラオスを書くことの意味」を明らかにすることは、清張が「戦後日本と

アジア」をどのように見ていたかを問う一助になるだろう。これまで朝鮮半島での従軍体験や、古代史への興味との関わりから「清張とアジア」を問う研究の蓄積は豊かになされてきた。本研究は、その流れに与するものであると同時に、清張文学におけるアクチュアリティという観点からもその文学的営為を跡付けようとするものである。

三 ベトナム戦争と戦後日本社会

本章では、松本清張のベトナム戦争との関わりを問う前提として、同時代の日本社会の状況を確認しておきたい。ベトナム戦争が日本社会にもたらした影響を、やや強引に整理するならば、そこには三つの側面が認められる。以下にそれらを述べつつ、「四」以下で松本清張のオリジナリティを問う際の論点を整理する。

ハイブズは、アメリカのベトナムに対する暴力が、日本人にかつて日本が中国に対して行使した暴力を相類的に想起させ、また、日本政府がアメリカのベトナムでの行動を介助していることが、「日本の歴史上最大の反戦運動を形成」させる動機になったとまとめている。しかしながら、一方でベトナム戦争は日本にとって「対岸の火事だった」と結論づけたハイブズは、日本人の事実誤認を次のように指摘する。

おそらく日本人はインドシナの事態を、隔絶した距離と島国的心性というレンズを通して見ていたのだろう。だから日本の左派も右派もこの戦争を、支配権をめぐるインドシナ人の間の一連の革命的権力闘争と見ることに

が難しかったのだ。戦争に反対する多くの者は、ベトナム人民がアメリカ帝国主義からの解放をめざして、ロマンチックで英雄的な闘争をしているのだと信じこんだ。日本の保守勢力は、アメリカの保守派と同様、この戦争が自由主義と共産主義の間の原理上の闘争だと考えた。²

しかし、果して同時代に生きていたとして、どれだけこの戦争の全体像が見えるのかという疑問は拭えない。少なくとも松本清張は「ベトナム人民がアメリカ帝国主義からの解放をめざして、ロマンチックで英雄的な闘争をしている」という見立てとは異なる見地に立とうとしていたのであり、本稿ではそのことを追って立証したい。

とはいえ、ベトナム戦争が日本にもたらした影響の一つは、ハイブンスが指摘する通り、「日本の歴史上最大の反戦運動」がもたらされたことにある。そして二点目には、日本におけるアメリカの相対化が挙げられる。

日本の反戦運動がもたらした重要な結果は、あつうの人のびとが、二〇年にもわたってアメリカへの非現実的な思い込みをしてきたあとで、アメリカへの批判を再び自由にできるようになったのだという気持ちになったことである。一九六五年初めの時期に大部分の日本人が根拠もなく抱いていたアメリカへの憧憬の感情が、市民が国際問題にかんする知識を増やすにつれ、次第に実際に即した冷静な判断に変わってゆくだろうという³ことは、容易に予見しえたところである。日本人がアメリカに寄せる好意は、一九六五年初頭の絶頂期から七三年の戦後最低期へと、ベトナム戦争への直接の反応として一挙に低下した。しかし経済の反映と国家的自信の増大とともに、いずれ日本人は、よかれあしかれ、アメリカに対してもっと均衡のと

れた見解を持つようになることはまず間違いないところだと思われる。³

三点目は、いわゆる戦後世代を形成する、当時の若者たちへの影響である。彼らは戦後の民主教育によって、反戦平和の理念を教えられており、それゆえに強い反戦感情と、日本がアメリカの重要な後方基地だったことによる危機感が育まれた。

若者たちがベトナム反戦運動へと向かう原動力を担保した論理は、「日本がベトナム戦争において、加害者であると同時に被害者であること」であった。小熊英二によれば、この論理を用意したのが小田実であったということになる。小田は当時作家であると同時に代々木ゼミナールで英語の講師を勤めており、若者との距離が近かった。それゆえ、生徒たちが「岸信介が戦犯だったこと」を知らないことに驚き、「被害者意識に根ざした平和運動はもはや限界であり、加害者意識の覚醒を訴えることで、戦争を知らない若者たちに届く言葉を創造しようとした」⁴というのである。

若者に対する牽引力だけでなく、ベ平連の顔としての影響力も備えていた小田は、ベトナム反戦運動にあたっていわば二つの「殺すな」も言うべき論理を用意していた。

「殺すな」と、自分たちを殺しにかかるかも知れない相手にむかって叫ぶのと同時に、自分たち自身にむかって「殺すな」と言う。前者は、戦争にまき込まれたくないという世論調査の大半を占める日本人の多くの気持ちそのまま通じる「殺すな」だった。私たちは、その「殺すな」において、あくまで「被害者」だった。しかし、後者の「殺すな」においてはちがった。私たちの日本はベトナム人たちを「殺す」側に立っている——その「加害者」として

の自分にかかわったの認識、自覚がそこにはあった。それゆえにこそその自分たち自身に対する「殺すな」だった。前者の「殺すな」と後者の「殺すな」のあいだには、大きい距離があった。その距離を超えたとき、「ベ平連」の運動はそれまでの平和運動とはちがった質をもつものになったのではないかと思う。

このように、被害者であると同時に加害者であるというナショナル・アイデンティティは、「殺す」という戦争において原初的な行動へと置換され、若者たちに対して説得力を持つものへと練り上げられたのである。同時に、かつての戦争、すなわちアジア太平洋戦争の記憶を生々しく保持していた先行世代にとって、「殺す」という言葉はかつての記憶を強力に呼び寄せる機能を備えていたはずだ。それゆえ世代を超えた協同性がベトナム反戦運動に込められることとなったのだと理解できる。清張の場合、世代的には「かつて」を知る側に位置されるだろう。この世代はとりわけ、ベトナム戦争と「かつて」の戦争とを相似形で捉える想像力を有していたが、結論を先に述べれば、清張の思考の枠組は一般化された図式に回収されることがない。詳述は後の論に委ねたい。

小田実自身は、ベトナム戦争がこれまでの戦争とは明らかに異なる側面を有していたことを、次のように指摘する。すなわち、ジャーナリズムの役割の変質である。

戦争はまず新聞、雑誌、本、テレビジョンなどのジャーナリズムの活動を通じて人びとの視界に入ってきた。戦争の記事や写真はしょっちゅう人びとの眼に触れるところに出ていたし、「従軍戦記」もいくつか「ベスト・セラー」になっていた（「ベ平連」の直接の関係者の著作だけについて言えば、

開高健の「ベトナム戦記」)。ことに、そのころのはやりの言い方を使って言えばテレビジョンが戦争をお茶の間に持ち込んだ。

ファシズム体制下で情報統制が敷かれていたアジア太平洋戦争期とは大きく異なり、ベトナム戦争期の日本では戦後ジャーナリズムが形成されていた。その状況下で戦争は、一方で人口に膾炙した現象と化していたが、それは同時にテレビによって伝播され、あるいは「ベスト・セラー」として消費される対象ともなっていたのである。清張に焦点化すると、彼の編んだ言説はこの戦争報道のありようを相対化する性質を持っている。このことも詳論は後に委ねるが、ここで先に述べておきたい。

さて、小田実が主導したベ平連は、「ワシントン・ポスト」への反戦広告掲載において清張とも関わりを持つ。広告に関し小田は次のようにまとめている。

この反戦運動の基本は簡単だった。「ワシントン・ポスト」に二度目に出した「反戦広告」(67・4・3)に大きく岡本太郎氏に頼んで書いてもらった文字が示すように、「殺すな」——それが基本だった。これは日本語で書かれていたが、広告の文面の英語の見出しは、《STOP THE KILLING! STOP THE VIETNAM WARD!》だ。先に、「殺すな」が来て、それから「ベトナム戦争をやめろ」がつづく。この順序は端的に私たちの気持を言いあらわしている。いろんなことがここで言えると思うが、ひとつだけ指摘しておく、私たちにとって「反戦」は抽象的なイデオロギーの問題でなかったことである。まず、具体的に「殺人」、「殺戮」が眼に見えていた。その上での「ベトナム戦争をやめろ」である。⁷

また、ベ平連の内部資料（ベ平連事務局連絡速報—No.1'66.4.6）には次のような記述があり、ここで清張のベ平連への関与の在りようが実証される。

○「ワシントン・ポスト」への反戦広告のよびかけは、つぎの十三氏の連名で近く発表される。いずみ・たく、岡本太郎、小田実、開高健、加藤芳郎、鶴見俊輔、桑原武夫、久野収、松本清張、小松左京、永六輔、淡谷のり子、城山三郎。このための記者会見は、小田氏の帰国を待ち、四月十五〜十六日頃行なう予定。⁸

清張は鶴見俊輔に乞われて広告掲載に賛同した。げんに掲載された広告の右下には、「Seicho Masumoto novelists」の文字が見える。集会やデモに参加した形跡は認められないものの、おそらく清張は大いなる共感を以って広告掲載の運動に参加したのである。

清張自身がインドシナ半島へと赴き、ファン・パン・ドンとの単独会見に成功するのは、広告掲載からちょうど一年後の同じ月のことだった。



【図1】Washington Post 1967.4.3

四 戦争とジャーナリズム——開高健『輝ける闇』との比較から『象の白い脚』を分析する

ベトナム戦争に関連する松本清張の著述を参照すると、その多くが新聞へのコメント、対談、ノンフィクション、あるいはグラビアが多数を占め、小説はむしろ少ない。その中で、ベトナム戦争と正面から向き合った小説が、『象の白い脚』（原題『象と蟻』、『別冊文藝春秋』一九六九年八月〜七〇年八月）である。本章では、この作品を開高健『輝ける闇』と比較検討することで、清張の問題意識や小説のオリジナリティを析出したい。『輝ける闇』は書き下ろし長編として一九六八年四月に発表。そして、清張と開高ともに現地に赴いている。更に、作品のモチーフが重なること、それ以外の重要なポイントが、両作において重なると同時に大きな差異を見せることである。モチーフとは、戦地におけるジャーナリズムと言語との関係であり、重要なポイントと述べた点もここに重なる。

先にベトナム戦争期の日本におけるジャーナリズムの役割の変質について述べたが、事はアメリカでも同様だった。一九六四年、ピューリッツァー賞は新しい報道部門を用意した。それは調査報道と呼ばれる部門である。コヴァツチとローゼンステールは、「コロンビア大学の主催でピューリッツァー賞を運営する全米の新聞社経営者たちは、地方報道というものは特別な注目を必要としなくなった賞にかえてこの新部門を創設した。彼らは報道機関が活動家、革新者として摘発者としてはたす役割を新たに重視した」¹⁰とまとめている。六四年前後になると、ジャーナリズムは戦時中のような連合軍の勇敢さやアメリカ兵の勇気溢れる姿を描くことから、汚職の追及をはじめとする新しい仕事へと舵を切るようになったのである。その八年後にはウォーターゲート事件が暴かれ、

ジャーナリズムという職業のイメージは決定的に変質することになった。

ベトナム戦争に関してアメリカ本国では、一九七一年に「ニューヨーク・タイムズ」と「ワシントン・ポスト」がいわゆるベトナム・ベーパーズを発表した。これは一九六三年に当時のマクナマラ国防長官がベトナムの戦局を記者会見で語った、その内容の全てを完全に否定するものだった。これも調査報道の代表的な例といえよう。このように、六〇年代後半は、少なくともアメリカ国内においてジャーナリズムが権力の監視の役割を大きく担うようになった時期だといえるが、戦地インドシナでのジャーナリストたちの様相は、この流れに全く与していなかったといえる。それは「象の白い脚」と「輝ける闇」が活写したばかりではない。ノーム・チョムスキーは松本清張のベトナム・ラオス訪問とほぼ同時期の一九七〇年にラオスに滞在した経験を、次のように語っている。

私にとつてはそれがジャーナリストと現場で過ごした最初の体験でした。通常はラオスに西側のジャーナリストがいることは滅多にないわけだけども、ニクソンがヴェイエンチャンに北ヴェトナムの戦車が集結しつつあるということを大々的に言ったあとだったので、大量のジャーナリストが飛行機でやってきた。みな有名な人たちでCBSや「ニューヨーク・タイムズ」、BBCの特派員もいた。彼らが泊まれるようなホテルは一つしかなく、ほぼいつもバーにたむろしていましたね。

飛行機を降りるとすぐにラオスでの活動に貢献している国際ボランティア・サービスの人が私を迎えにきました。彼はラオスを熟知していて、農村に住んでおり、ジャール平原への爆撃を知らせた人ですが、私が着くとすぐにそこに引っ張っていったのです。彼は何年間もこのことを世界に知らせようとしてきて、私は一週間ははずすと彼と一緒でした。難民キャ

ンプにも行ったのですが、それはCIAがジャール平原から三万もの人た
ちを追い出した直後のことで、これらの人たちがヴェイエンチャン近郊の難
民キャンプにいた。実際にここで何が起きているかを直接伝えることの
できる最初の機会だったと言っている。この人たちはそれまでの二年間洞窟
に住んでいて、悲惨な話を聞きましたが、キャンプに出かけてきたジャー
ナリストはほとんどいなかった。〔中略〕

アメリカ大使館にも行きましたが、ジャーナリストたちが報道していたの
は、五万人の北ヴェトナム兵士がラオスにいたのでアメリカはホーチミン
街道を爆撃しているという話。でも実際に爆撃されていたのはジャール平
原だった。そこで私としてはこの話がどこから出てきたのか知りたかつた
のだけれども、ジャーナリストの誰も説明してくれなかった。
彼らはただアメリカ政府の発表を繰り返すだけで何も知らなかったの
です。〃

戦地におけるジャーナリズムの機能不全が著しかったことは間違いない。後
述するが、そのことを清張も開高も確かに記述している。戦地では言葉が機能
しないという事実を、両者ともに文学的に形象化してみせたのである。より重
要なことは、両者がそのような機能不全を描きつつ、その先に何を見たかとい
う問題である。詳論に踏み込む前に、「象の白い脚」の書誌事項を確認しておき
たい。

『象の白い脚』の梗概は以下の通りである。

谷口爾郎は客死した友人の死の真相を探るため、内戦中のラオスの首都に
やって来た。入国の際、同じ飛行機に乗り合わせた西洋人が、ホテルの一室

そのような

で絞殺されるという事件が勃発。その事件に好奇心を抱いた在地在住の日本人もまた、何者かによって射殺される。ついには謎を追う谷口にまで魔手が迫る。¹²

また、主要作中人物は以下のように整理できる。

- 谷口爾郎(1935のみ「俊六」となっている。)→ジャーナリスト。友人・石田の死について調べるため、ビエンチャンへやって来る。
- 石田伸一→編集者。「去年」(一九六八年「稿者註」の九月十四日にビエンチャン着。十月二日に死体となって発見される。
- 山本実→石田の通訳をした。三十歳を出たかどうか。平尾正子の経営する書店に勤務している。
- 平尾正子→「コントワール」と「ビエンチャン・ブックスストア」を経営。四〇代。出身は関西(自称)。オーストラリア国籍だと作品末部で推測される。
- 杉原健一郎→東邦建設社員。ビエンチャン書房で谷口と出会う。
- 大久保医師→六十歳過ぎの独身の医師。東邦建設とR組から給与を得ている。
- シモーヌ・ボンムレー→五十歳過ぎ。一九六〇年からビエンチャンにいる。平尾とは知り合い。通信員。
- ベティ・プリングハム→「殺された」オーストラリア人の「人類学者」。谷口は手記において「アメリカ軍人」と推測している。

開高健「輝ける闇」の分析に入りたい。この作品において開高は、戦地における言葉の非日常的な機能の仕方を示している。

ベトナムにいる日本人男性である「私」は、書くことを生業としているが、その「私」の言葉はたとえば次のように描出される。

兵はとつぜん手をだらりとたれ、顎をおとした。ふいに彼はエア・ポケットにおちて眼も見えず、耳も聞えなくなってしまったかのようにであった。ヘインズが一生けんめいしゃべっているのに彼はネジまわしをおき、ふとたちあがって、ぶらぶらとどこかへ消えてしまった。「中略」兵の顔には指図されることへの嫌悪、憎悪、侮蔑、反抗などは見られなかった。そのような意識らしいものは何もなかった。ふいに彼は手も足もいきいきしながら失神してしまったのである。腫れが痛い感嘆と畏怖を私はその兵におぼえた。これほど精妙で無邪気、また徹底的な拒否をまだ私は見たことがない。幾度もどん底におちこんだ経験が少年期から青年期への私にはあったけれど、それはどの状態はまだ知らない。ここへ来てからもそうだ。水田の畦道や陸軍病院や戦闘直後の草原などで私はいくつとなく変形した人体を目撃したが、けっして《シャッター反応》を起すことはなかった。すぐに私はよみがえって何がしかの言葉を滲出し、原稿を書き、東京へ送った。そしてサイゴンの銀行に振込まれた金をうけとり、シヨロンで広東料理を食べ、むくむく肥った。惨禍を見れば見るだけ私のペンは冴える。私は屍肉を食うハイエナなのだ。鋼鉄の船腹にくっついたフジツボほどにも私はあの兵の倦怠と疲労を舐めることができない。兵はまさぐりようもなく疲弊している。(pp.89-91。以下、引用はすべて新潮文庫による。)

戦闘状態でないにも拘わらず、「手も足もいきいきしながら失神してしまった」、即ち世界とのあらゆる繋がりを唐突に自ら断ったアメリカ兵の「徹底的な

拒否」に対し、そうした拒絶なく言葉を生み出し、東京へ送り続ける「屍肉を食
るハイエナ」としての「私」自身への批判的、あるいは軽蔑の眼差しが描かれる。
「惨禍を見れば見るだけ私のペンは冴える」と「私」が言うとき、「私」にとって言
葉とは、「ハイエナ」たる「私」を存立させる根拠となっており、「私」同様に軽蔑
の対象となっている。

その一方で、他者の戦争に対する嘆きの言葉もまた、「私」と共鳴せず、「私」に
届かない。「私」がベトナムで各国の新聞を読んだ際、「紙のなかには響きと怒り
があった。人びとは戦争を嘆き、罵り、祈り、議論し、主張し、訴え、叫び、脅迫し、
絶望していた。しかし私はタバコで舌を荒し、汗とコニヤックにまみれて重く
なり、いぎたない眠りへ沈んでいった」(p.96)と述べるところに、それは表れて
いる。「人びと」の「嘆き、罵り、祈り」と「私」の様相との間に、「しかし」という逆
説の接続詞が入っていることは、「私」と「人びと」との間に断絶があることを鮮
明に示している。

また、戦地におけるジャーナリズムの機能不全についても、単にジャーナリ
ズムという営為の枠組を超え、言葉それ自体の機能不全として次のように描か
れる。

目を追うにつれて世界各国から記者がおしかけるようになり、キャプエ
はとめどない議長ぬきの会議がおこなわれる会議室か、たえまなくひそひ
そ声が潮騒のようにひびく停車場のようなものに変った。(中略)
私は白蟻が木を食べるように時間を食べている。白蟻は家を倒し、塔を
建てるが、私はヘルノーをすすりつつ椅子のなかでじりじりと太るだけで
ある。言葉は人の口からこぼれおちた瞬間、手や足をちぎられてびくびく
うごくが、しばらくたつうちに乾からびてしまう。私の内部にはがらんど

うの倉庫があつて褪せた言葉がギッシリつまり、埃をかぶるままになつて
いる。ライオンはライオンと名づけられるまではえたいの知れない凶暴な
恐怖であつた。けれどそれをライオンと名づけたとき、凶暴ではあるが一
個の四足獣にすぎないものとなつた。人びとが「持てるものと持たざるも
のとの争闘」といい、「お袋とやりな」というとき、戦争はちよつと傷ついて
そこにたちどまり、形を見せた。しかしつぎの瞬間、戦争は解体してもの
とらえようのない多頭の蛇となり、野をこえ山をこえ、とめどなくひろ
がつてわだかまり、屍臭も血ものこさずにガラス窓から消えていった。ど
れほど切られても、溶かされても、蛇は倒れて大地に接触すればたちまち
傷口から新しい頭を生やしてたちあがってきた。(pp.207-210)

ここに示されているのは如上の事柄に加え、戦争を言語化することの不可能
性だと言えるだろう。

このように、「私」が「私」自身、また、「人びと」に対して抱く相容れなさは見易
いのだが、しかし、その相容れなさの根源はどこに求められるのだろうか。その
根拠は、以下の叙述に表れているだろう。

事態はいよいよ混沌、かつ精妙の一端をたどっている。誰かの味方をす
るには誰かを殺す覚悟をしなければならぬ。何と後方の人びとは軽快に
痛憤して教養や同情の言葉をいじることか。残忍の光景ばかりが私の眼に
入る。それを残忍と感ずるのは私が当事者でないからだ。当事者なら死体
が乗りこえられよう。私は殺しめせず、殺されもしない。レストランや酒場
で爆死することもあるかもしれない。しかし、私は、やっぱり、革命者でも
なく、反革命者でもなく、不革命者ですらないのだ。私は狭い狭い薄明の地

帯に竹む視姦者だ。(pp.101-102)

即ち、戦争行為に對峙した際に否応無く立ち現れる、絶対的な非当事者性が、「私」をあらゆる言葉から遠ざけるのである。そうであるからこそ、「私」は戦地の残忍さを「残忍」と名付けてしまうことに抵抗する。戦地とは、言葉を喪失した世界なのである。言葉を持ってなくなった「私」は「視姦者」でしか在りえない。

『輝ける闇』の主題は様々に議論されてきたが、このように見ると、それは大きく言えば戦争と言葉との関係であり、両者に挟まれた人間の主体性の問題だと言えるだろう。そのことを保証する更なる手立てとして、素娥の存在はとりわけ重要である。素娥は梗概の上では「私」の愛人の少女と説明されるが、彼女の役割は「戦争と言葉」という問題系において理解されるべきである。

「私」は確かに素娥と性的関係を結び、ひと時の安楽を得てもいるのだが、その安楽の要因は性的充足のみに求められない。「犬。おいしくない」／素娥は小さな、白い歯を見せてのびのびと笑った。それが何よりも複雑でないことが私を安堵させた。議論や言葉のない場所が私はほしかった」(p.105)と書かれるとき、「私」が素娥を求める動機は、一読すると言葉から逃れることにあるように見える。しかし、事実はむしろその逆である。この引用で述べられる「私」が逃れたい言葉とは、本論でこれまでテキストから析出してきたような「私」自身、あるいは「人びと」の言葉であり、「私」にとって言葉と自身との関係を捉え返し、新たな〈言葉〉を獲得していくために存在するのが素娥なのである。このことは、次の箇所を根拠とできる。

素娥はしばらく考えてからつぶやいた。

「たくさんの人が死ぬわね」

あぐらをかいた両膝に手をのせ、少し首を傾けた彼女には不動と静謐があった。それは寢床に死体がある人の静謐かもしれない。私の寢床には汗しかない。死は靴からも去り、寢床からも去ったのだ。

酒を飲みながら私はノートにいろいろな画を描いた。素娥にそれをわたすと、ひとつひとつの画のしたに字を書きこんでから発音を教えてくれた。たがいの眼もおぼろにしか見えないような闇のなかで身ぶり、手ぶりをまじえて一つの単語を争っている、手でじかに粘土を練っているような気持がしてくる。闇が集められ、砕かれ、しめられ、しぼられて、一語、一語となっていたのである。それは茸の群れのように私の内部に、体のまわりに、蚊帳や土がめのある洞のあちらこちらに生える。(p.192)

「私」、また、「人びと」の言葉と、「私」の画をもとに素娥が差し出す言葉とは別物である。そして重要なことは、このようにして素娥と格闘しながら生み出された言葉しか「私」の内部に根付かないということだ。その格闘は「手でじかに粘土を練っているような気持がしてくる」と述べられるが、「粘土」という言葉は「私」自身を表象する際にも用いられる(「どんな鮮烈な観念も朝の10時まではびくびくしているが、陽が曇みだせば忽ちぐにやぐになつてくたばつてしまい、あとには粘土のような、アミーバのような私が残された」(p.200))。そうであるならば、「私」自身が〈言葉〉以前の存在であると言え、素娥との格闘は〈言葉〉の産出であると同時に、「私」自身の再生をも示唆している。

こうして「私」は、以前の「私」自身や「人びと」のそれとは異なる〈言葉〉を獲得するに至るのだが、その内実がどのようなものか、換言すればそれがいかなる〈言葉〉なのかはテキストから具体的に名付けることができない。それはあくまで抽象のレベルに留まっているとと言える。しかしながら、重要なのは、戦地に

あって「私」が素娥の助けを得つつ、これまでとは異なる「言葉」に辿りついたという、その行為と過程なのではないだろうか。「輝ける闇」の終末部で「私」は素娥のもとを離れ、再び戦地へ向かうことを決意する。その動機に「言葉」の生成が関わっていることが、次の部分で示されている。

素娥といっしょにすごした時間は獣のように純粹で、深く、精妙であり、習慣の腐臭がなかった。彼女は森や渚のある孤島であり、広大だった。私は上陸して森のふちを散歩したけれど、何も変えなかった。変えられもせず、変えようとも思わなかった。柔らかく、温かく、激情をひそめながら静謐な腹腔の一部に私は碎かれるたびの自身を埋めることにふけてきた。啞であることが私を精錬してくれた。コウモリ、フクロウ、籠などという単語を闇のなかでひとつひとつ蒸溜しているときの、あの安堵と精緻をしのぐものがあるだろうか。彼女は稚く拍手したり、熟して首をかしげたりした。その顔を見て笑い、私は渚で貝殻を拾って去る巡礼だった。「中略」私は自身に形をあたえたい。私はたたかわわない。殺さない。耕さない。運ばない。煽動しない。策略をたてない。誰の味方もしない。ただ見るだけだ。わなわなふるえ、眼を輝かせ、犬のように死ぬ。見ることはその物になることだ。たとすれば私はすでに半ば死んでいるのではないのか。(pp.250-253)

「私」は素娥との関係を通して「言葉」という「形」を獲得し直したことの次に、「私」自身に「形をあたえ」るため、戦地へ向かうのである。「言葉」が獲得された先に立ち表れる「私」とはどのような主体であるのか、この点は「輝ける闇」に留まらず、開高健のその他の著作と併せてみなければならぬだろう。

本論においては一先ず次のように整理しておきたい。開高健『輝ける闇』は、

戦地ベトナムにおけるジャーナリズムの機能不全という状況をベースとしつつ、「私」という主体の問題に焦点を当て、主体と言葉との関係を描いてみせた。その際、既存の言葉は全て「私」によって拒まれ、素娥の存在を仲立ちとしつつ、言葉が生成されるその始原へと向かう。「私」の営為が表象されている。

では、松本清張『象の白い脚』は戦地をいかに表象しているのだろうか。一読すると、『象の白い脚』も「輝ける闇」と設定が重なる部分がある。一人称「輝ける闇」と三人称「象の白い脚」という語りの差はあるが、両者とも視点人物に日本人男性ジャーナリストを据えている。また、現地において女性と特別な関係を取り結ぶことが、物語上の要諦を締めている点も重なり合う。

『象の白い脚』の場合、その女性はフランス人通信員のシモーヌ・ボンムレーである。シモーヌは現地在住の日本人通訳・山本によって、次のように説明される。

「通信員といっても、以前はどこかの社の嘱託だったが、酒が好きで仕事をしないものだからクビになったんですね。シモーヌ・ボンムレーというんです。亭主はフランスで死んだという話ですが、向うで別れてこっちに来てきたのかもしれない。シモーヌという女は、一九六五年のクーデター(注、この年一月にノサバン副首相とシーホ国警長官派がクーデターを起したが失敗、ノサバンはタイに亡命、シーホは帰順したが脱獄を企てて射殺された)のときにはもうピエンチャンにいました。それからずっとだというから古いもんです。そのあと、イギリスやアメリカの新聞社に随時契約でニュースを送っていたらしいですが、これもいいタネを送らないものだから破算になったのです。かたちだけは残っていますがね。もっとも、ここではあまり情報ありませんよ。共産軍との緊張はラオスの国

策上持続状態となっていますがね。で、シモーヌさんはパリにも帰れずここに残って酒浸りです。もうアル中ですね。頭もおかしくなっているらしいです。独身でね。戦後すぐにはシンガポールあたりにいて美人記者だったという噂です」(p.245。以下、引用は「松本清張全集」二二による。)

シモーヌは一貫して酒浸りであることが強調されるが、一方で、仕事をこなしているかどうかは不問に付されるにも拘わらず、「通信員」であることもまた、繰り返し言及される。彼女もまた、素娥とは質が異なるものの、「戦地にあって言葉を扱う女性」として表象されるのである。

慎重にテクストを問すれば、酒浸りであることが強調される割には、シモーヌには事態が「見えている」ことがわかるだろう。彼女が谷口に披瀝する、「戦争」の記事は読者に受ける。とくにフランスではね。旧植民地がきちんとおさまっていないのをうれしがる人がいるのさ。それでも、政府軍の発表には真実の部分があるよ」(p.246)という醒めた現状認識が、そのことを証し立てるだろう。この点は小説の結構を検討するうえで重要である。なぜなら、酒浸りであるはずのシモーヌの言葉に促される形で、視点人物の谷口が動かされているからである。

たとえば、「わたしは通信員を失職して以来、取材感覚が鈍っているからね。あなたのほうがよっぽど取材能力があるよ。わたしのほうで教えてもらいたいくらいだね」(p.253)というシモーヌの言葉によって、谷口は石田やプリングハムの死の謎、あるいは、ラオスにおける阿片の流通というより大きな謎を解くことへと向かわされる。換言すれば、シモーヌの言葉によって、谷口はジャーナリストであることを強いられるのである。この場合、ジャーナリストとは、開高が描いたような頹廢の主人公ではなく、真相を抉り出す使命を具えた、六〇年

代のアメリカで付与されたような意味でのジャーナリストである。

また、シモーヌは谷口に、素娥とは異なる形で言葉を与える。それは、谷口が明かすべく追いかけている先述の謎に迫る内容そのものである。

谷口はこのテクストの鉛筆の線がまったく無意味なところにあるのに気がついてきた。出てくる同じ単語に何回もアンダーラインがある。記憶の確実のためにしてはうるさいくらいだし、単語の綴りのアルファベットにも一字か二字だけ鉛筆がついている。(中略)谷口は第一頁から、というのはアンダーラインの最初のページから書き出しだろうと思っ、鉛筆の字だけを拾ってみた。『They ever have lived in Rangoon during the war』との成句を得たときは、谷口は全体の解説に急に熱心になった。(p.337)

谷口に乞われたことへの応答としてシモーヌは「ラオ・英会話」のところどころに線を引き、谷口に謎解きのヒントを与えている。それは谷口に「熱心」さを与え、物語の面においても展開を促す機能を持っている。だが、その「熱心」さが遠からず谷口の理性の死に発狂をもたらしてもいる。

「象の白い脚」結末部では、谷口が発狂直前に東京の友人へ宛てて書いた手記が引用される。そこにも、谷口がシモーヌの言葉に導かれ、発狂へと向かったことが示されていた。

平尾正子はオーストラリア人と連絡があるのではないかと思いはじめたのだ。

このとき、シモーヌが平尾正子について、うっかり Because she in not ……と云いかけてあとの言葉をあわてて呑んだことも思い出された。(中)

略すると、ぼくにはじめて「They」の意味が解けてきた。夫婦である。

シモーヌの言葉もぼくの耳に蘇ってきた。「They」は何だときいたら「地球上の住人は半分が男で、半分が女」とうそぶいていた。あまりにありふれた言葉なので、いい加減なことを云うと聞き流していたが、彼女はあれでちゃんとヒントを与えていたのだ。複数代名詞が二人以上の多数とは承知していたが「多数」の概念にひきずられて、「夫婦」に気がつかなかった。(p.359)

こうして、「言葉にならなかつたものを練り上げる」という点で、『輝ける闇』の「私」と素娥、『象の白い脚』の谷口とシモーヌとは重なりを見せる。しかし、両者の内実は全く異なる。『象の白い脚』の場合は、個人の主体性よりもむしろ小説の駆動力として「言葉にならなかつたものを練り上げる」ことが必要とされ、それはサスペンスの手法に他ならないとも言えるだろう。

『象の白い脚』を考えるにあたり重要なのは、女性の機能よりもむしろ言葉そのものの在りようを見ることである。

この小説において、石田や山本の死の真相や平尾正子の正体、シモーヌの過去、また、なぜ谷口が発狂したかという各点は、一読すると雄弁に語られているように見える。しかし、これらは全て、事実ではなく推測として言及されるに過ぎないような記述となっている。雄弁に見えながら、実は真相が何一つ書かれていないのである。このことが、なぜベトナムではなくてラオスを描いたのかという点に関わってくるだろう。

考察の鍵となるのは、やはり言葉である。『象の白い脚』には、言語使用をめぐる緊張関係が様々に書き込まれており、この点を丹念に読み解くことで、この小説はまた異なる相貌を見せるのである。

そもそも、本作は冒頭から、国籍と言語使用にまつわる緊張が示されていた。

ラオス人スチュワードに谷口は中国人と見られたらしく、バンコック発の英字紙よりも漢字紙「星盤時報」を先に突き出された。その日の「バンコック・ニューズ」紙は空港でざっと眼を走らせたこともあったが、隣の中年アメリカ人に気かねて受けとらなかつた。英字紙などひろげていたら、何を話しかけられるかしれない。(p.177)

この場面以下で、谷口は一貫して自分が書く物が解読されないように配慮を怠らない。石田の怪死の謎を追う上での心構えとも言えるが、そこには常にアイデンティファイされることへの警戒が底通している。あるいは、平尾正子お抱えの中国人運転手のリュウが英語を話せると分かった時に谷口が安堵するという記述(「名前は?」/「リュウです」/「言語を持ったときの安心がひろがった」(p.24))は、谷口自身の言語運用能力の不足¹⁾を描出するのみならず、言葉が通じないことの不安と、同じ言語を解さない者に対する積極的な断絶の証左ともなる。この、言語とアイデンティファイをめぐる緊張関係、更に言えばアイデンティファイされることへの忌避は、当人の意志の有無に関わらず、複数の作中人物にも見受けられる。そしてそのことは、谷口の場合と異なり、各人の言語運用能力の高さと絡まりながら浮上する。

たとえば、谷口の通訳を務めつつ、結局は謎の死を遂げた山本は、出自が明かされない。同時に、「山本は谷口のキイをフロントに渡し、ベトナムの女とベトナム語で笑いながら短く話していた」(p.197)、あるいは「山本のフランス語は相当なものに聞えた。英語もラオス語もできるし、語学の才能がありそうだった」(p.212)と、その言語運用能力がいかに涵養されたか説明のないまま言祝がれる

とき、彼の人物造形がより不明瞭になるように思われる。

同様のことは平尾正子にも言える。「彼女は、英、仏、タイ、中国語がペラペラなんです」(p.226)、「平尾さんはあの通りフランス語、英語、中国語、ラオス語はペラペラで、つまり、この土地で商売に必要な外国語はみんな完全にマスターしているのですよ。あの女性は語学の天才だと思いますな」(p.311)という、彼女に対する評価の語り口は、山本のそれと大いに通じている。そして山本と同様、このことよって却って彼女が何者か、さらに言えば彼女が「何人」なのかということが攪乱されると言えよう。

作中人物だけでなく、ラオスという場所も多言語が交差する空間だった。このことは「ラオス語は、ラオ族がシャム族と姉妹民族である関係上タイ語の姉妹語である。外国語としてはフランス語が重要な地位をしめており、英語は最近普及しつつあるが、まだまだである」(p.189)という記述、あるいは、「ビエンチャンには日刊紙がない。政府筋からラオス語、英語、仏語のタブロイド判の官報が週一回か二回出るだけだと聞いていた。そこで、新聞の立売りが来ている以上、とくべつに新聞らしいものを売っているのかと思っただが、それがバンコック発行のタイ語新聞だった」(p.276)という箇所から明らかである。

さらに、ラオスをそのような場所にした遠因は、「寺はそのラオス人のスラム街と隣合ったところにあった。そうして、あたかもその寺が境目のように、一方が観賞用の植物の多い高級住宅地——クリーム色と白い壁の洋風住宅建築がならんでいた。グリーン色の建物は、今もこのラオスを文化面で支配しているフランス植民地様式で、白いのにはアメリカ風であった」(p.30)との記述に端的に表れているように、帝国主義に基づく植民地支配に他ならない。即ち、「象の白い脚」には、一九四五年以後も内実は「植民地」であり続けたラオスの、文化、言語の混淆の様相が書き込まれている。しかし、事はそれほど単純ではない。こ

の引用に表れているように、ラオス内部にはフランスもアメリカも並存しており、また、周辺の東南アジア諸国や中国、インドの人々も入り込んでいることが、小説において鮮明に表象されている。ラオスとは、第二次世界大戦の「終結」後、冷戦の展開に従い複雑化する国際情勢の縮図とも言える様相を呈していた、まさに現代的な土地だったのである。

清張が見出したラオスという文学的空間では、多言語が交差する。そこに時折顔を出す「日本」は、言語ではなくモノを通して表象されている。

濃いコーヒーが飲みたかったが、ルームサービスは時間がかかる。それに、水のような牛乳がたっぷり入ったやつで、味がうすい。ジュースは日本製の名もない会社のものであった。ラオスにはまだ植民地時代の手荒なところが残っていた。(p.269)

トーストとジュース。罐詰は日本製の二流品である。これを見るたびに日本から輸出される黒繻子がメオ族の阿片との交換品になるという話を思い出す。(p.321)

このように書かれるとき、ラオスにおいて日本「語」は存在しない。それが、「日本語話者」≠「日本人」も存在しないことをも示唆してはいないだろうか。

モノを通して表象される「日本」は、次の記述からも窺える。

その家のドアをノックしたが返事がなく、遠慮しながら開けると、そこは八畳ばかりの待合室らしく、日本人の若者が五、六人椅子にかけて将棋を指していた。「中略」それは待合室というよりもクラブといった感じで、

彼らはあきらかにピエンチャンの住人だった。谷口は、話に聞いたラオス技術援助部隊のメンバーだろうと判断した。(p.226)

技術援助部隊の青年たちは「ピエンチャンの住人」と名指されてはいるが、大久保医師の下に寄り集まり「クラブ」を形成する様子は、山本や平尾正子、シモーヌと比べると、ラオスの住人とは言い難く、むしろ技術援助で関わるのみ存在で、現地社会に介入しないという意味でモノ化(非人間化)される。ラオスにおける「日本製」の「雑話」のような存在なのではないだろうか。

このように、へ日本を象徴するものの物質性が強調されるラオスでは、日本語と少しの英語しか操れない谷口は、ラオスに受け入れられない存在なのではないか。一方、へ日本語話者という単一の枠を超える山本や平尾正子が、ラオスの住人でいられたことも、また当然なのである。

このように、『象の白い脚』には戦後の日本語話者たちが「日本人」という一枚岩としては存在し得ないことが示されているが、個人における言語の混淆の様相はシモーヌを通じて表象されてもいる。彼女はフランス語だけでなく、オーストラリア訛りの英語も自由に操れる。そして、シモーヌと平尾正子とが繋がったとき、この小説は新たな相貌を見せる。

物語上、二人の繋がりが確実に確認されるのは、谷口がバー「ファイア・ツリー」で二人の姿を見かける次の場面である。

谷口は、そのとき煙草の煙の暗い霧の中を二つの影が奥から出て表の下アに急ぐのを見た。フロア・ダンスと向うの壁のボックスとの間である。一瞬、客の前に黒い影が流れた。谷口が眼をみはって入口のほうを振り向いたときドアの閉る音が聞えた。

たしかに二つの人影は女だった。それもシモーヌと、「コントワール」のマダム平尾正子のものである。ようであるというのは、顔は全然分らず、姿恰好だけの判断だが、その姿もこの暗冥と煙霞の中では輪郭が模糊としてぼやけ、しかも流れるように通りすぎて、視覚にしかととまらなかつたようである。(p.287)

この叙述以降、二人の関係への言及が見られるのは、終盤の谷口の推理においてである。その内容を整理すると以下のようになるだろう。

まず、平尾正子はオーストラリア人と婚姻関係を結んでいた。これが、シモーヌが示したヒントにおける「They」である。故に彼女は日本国籍がない。二人は戦時下ラングーンにおり、一九四二年から四五年の敗戦まで同地は日本軍が占領していた。しかし、「日本軍が敗北し、英軍がビルマを奪回する直前、彼らは英軍側に寝返り、ラングーン在住の多くの日本軍人や民間人をスパイ犯罪で密告した」(p.37)。こうした第二次世界大戦終結直後の時期、シモーヌもまた、記者としてラングーンにいた。ここでシモーヌと平尾正子とが何らかの繋がりを得た。その後、一九五三年に平尾正子はラオスに入り、六〇年になってからシモーヌもラオス入りした。

ここで二人の女性に共通していることは、次の各点である。まず、二人とも、生まれた「国」ははっきりしている(シモーヌはフランス、平尾正子は「閩西」(p.32))。また、複数言語を操り、「異国に捨てられた」(p.28)存在でもある。さらに、彼女たちは戦時下、また終結後を通じて、環太平洋地域を渡り歩いている。そうなった原因の一つ、あるいは本質的な要因として、第一次世界大戦とその後、東アジア、東南アジア地域の混乱、いくなれば戦争状態が根深く横たわっているのである。

平尾正子とシモーヌの多言語性を追ってみると、ベトナム戦争それ自体や阿片をめぐるCIAの工作行為だけでなく、それらが過去の戦争Ⅱ第二次世界大戦の延長線上で起きているという史的スパン、また、それらがベトナムやラオスだけで起きているのではなく、環太平洋地域という規模で因果の連なりを持つているという、空間的スケールの大きさをも示していることに気づかされる。

こうしたことを示すためには、谷口では役不足であり、平尾正子とシモーヌという二人の女性が必要だったのではないか。そして、彼女たちを表象するためには、直接的な戦闘行為が行われているベトナムではなく、その隣で様々な欲望が渦巻き、多数の勢力が林立しつつも、「ピエンチャンは未発達の間とだけ」だけでなく、空港から通ってきた印象だけが、どこか咲き損ねの陰花植物のような感じがする。それも毒々しい花ではなく、日蔭にある色のない感じである。その輪郭に見当がつかないのが、気持にとけこめない主な理由かもしれない(P188)という、輪郭が掴めない、多元語性によって表象されるラオスという土地が、最も相応しかったのではないか。

戦地におけるジャーナリズムの機能不全、換言すれば空白化という状況を、開高は「私」の主体性を問い返す場とした。その一方で清張は、その空白化を小説の構造自体に生かした。「ジャーナリスト」谷口を用意しながら、谷口を通して他言語の分かなさを描き、他言語話者を欺き、また、谷口自身が欺かれ、翻弄されるストーリーによって、テキスト内に空白を作っているのである。ここには、多言語性が発生することで空白が醸成されることが示されている。

また、清張は個人の言語運用の様相を描くことを通して、環太平洋レベルで人の動きを捉えた。戦争は人々の大きな移動をもたらす、一つの交通の場として捉えることができる。そこでは「戦争」の、近代国家という「主体」同士の争いと

いう側面が無化され、近代国家の枠組を超えたところで個人の様々な動きが表象される。この観点でシモーヌを生み、平尾正子を生むことを可能にする。更に言えば、近代国家同士が結んだ戦争の「終結」も、個人には及ばないことをも、「象の白い脚」は表象している。戦争は終わらないのだ。

五 松本清張の作為と発言

「五」では、「象の白い脚」テキスト内部の問題を離れ、清張自身がどのような作為を行っているか、また、彼の発言やエッセイを閲することを通して、彼のベトナム戦争へ向けた視線の独自性について考えたい。

まず、「象の白い脚」というタイトルに一考を加える必要がある。綾目広治氏は次のように述べている。

因みに『象の白い脚』という題名の「象」は、ラオスが「百万の象」という意味なのでそれから採られたものである。「白い」というのは首都のピエンチャンが「白檀の都」という意味なのでそこから採られたものか、あるいは阿片の白い粉のイメージから採られたものか、そのどちらかであろうが、後者の選択であったと考えた方が、小説のテーマに即しているだろう。ラオスは阿片の白い粉で立っている、という意味合いになるからである。¹⁵

「ラオスは阿片の白い粉で立っている」という解釈は十分に首肯できる。しかし、この作品の原題が「象と蟻」だったこと、それに、次の清張の記述を併せると、別の可能性も見えてくる。

アメリカ軍は北ベトナムの情報を取ることに躍起となっているが、容易に入手できない。アメリカ軍は手探り状態で攻撃しているのと同然だが、北側は米軍の動きをつかんでいる。これは南の解放戦線についてもいえることで、「象と蟻の戦い」(リップマンの言葉)に象が苦しむ原因の一つがここにあった。¹⁶

リップマンの言葉を借りつつではあるが、この言葉を援用すれば、この場合、象はアメリカ、蟻はベトナムを指す。すると、象はラオスであると同時に、アメリカであるかもしれない。

また、CIAの阿片工作をはじめとするラオスへの内政干渉の記述は、後から大量に加筆されたものであることが、調査¹⁷により判明した。たとえば、次の谷口の手記の一部は、原稿には存在しなかったが、初出の時点では存在している部分である(全集ではp.357に該当)。

ラオスで「内戦」がつづくのはアメリカの介入があるからだ。CIAはおびただしい機関員をラオスに入りこませ戦争をつづけさせている。一九五二年のインドシナ中立に関するジュネーブ協定を一応「尊重」しているかのように見せかけている。アメリカは、ラオス政府の要請もあって空軍も地上部隊も送っていない。その代り、軍事顧問団とCIAとアメリカ製兵器とを送りこんでいる。CIA機関員は宣教師や商人に化け、ラオス国内の僻地に入って謀略活動をつづけている。ラオスの「内戦」ではラオス人どうしが鉄砲を空にむけて撃っているというのは、本気で殺し合いをしていないからだ。アメリカの介入があるかぎりラオス戦争は終熄しない。

また、次の箇所は、原稿にも初出にも見られないが、初刊の時点で初めて登場する記述である。谷口のひらめきとして加筆されている(全集では pp.223-224に該当)。

突然、「CIA」という二つの略字が谷口の前に花火のように開いて消えた。

……CIAの工作員だったら締めたドアを開けて部屋に闖入することも、殺人を行なうことも、そのあとでドアを閉じて中から施錠したようにみせかける「密室の犯罪」も可能ではなからうか。CIAの工作員はあらゆる忍者技術を身につけ、それに熟達しているとだれでもが信じている。「中略」そうだとすれば、あのオーストラリア人の正体は何であったのか。彼はどのような目的でこのピエンチャンにやってきたのか。谷口は眼前にCIAの花火が上がったとき、そしてそれが消えたあとも、その残光に憶測が結びついて揺曳した。まったくそれは憶測だが。

「CIAの花火が上がった」と述べる通り、「象の白い脚」におけるCIAの問題は、谷口が唐突にひらめいたかのように浮上しているが、同様のことが清張自身にも言えるかもしれない。尤も、この作品執筆以前から一貫してアメリカの外交政策ならびにCIAの存在に眼が行き届いていた清張からすれば、CIAのラオスへの介入という「見えざる事実」に対し確信が持たからこそ、後から加筆したのかもしれない。しかし、このことはあくまで推測の域を出ない。

そして、ベトナム戦争に対する清張の想像力の在りようにも注目したい。清張はエドガー・スノーとの対談の中で、次のように発言している。

松本 この北爆続行のことで、西側はたいへん驚き、それから怒りもしたわけです。しかし、いくらジョンソンがベトナム師でも、声明の翌日からあれほど露骨な行動はとれないと思います。これは私の考えでは、ジョンソンの意思ではないと思う。ジョンソン声明のあとすぐ北爆をやったのは、おそらく、ホノルル(太平洋統合本部)がサイゴンの司令部、むしろホノルルの意志だったという気がします。こうしたことから、今のアメリカはかつての日本の軍部に似ているという考えがでてくるのです。¹⁸

また、同じことをノンフィクションとして書いてもいる。

平和を望んでいるのが、かりにワシントンのハト派だとしよう。もちろん、この中にもタカ派はあるが、ジョンソン声明を不満とし、ベトナム戦争をつづけたいと考えるのはホノルル(太平洋統合参謀本部)かもしれない。サイゴンの米軍司令部よりも、サイゴンを統轄しているホノルルのほうにその感が強い。ジョンソン声明の翌日から十七度線より二十度線にいたる広い地域への北爆続行も、世界はジョンソンの真意を疑ったが、ホノルルの「独断専行」だとすると理解がしやすい。その後、二十度線の地域(タンホア省を中心とする)の爆撃はジョンソン声明の範囲に合致すると云い出したワシントンの弁明をきくと、私はかつて日本の「関東軍」が政府の抑止指令にもかかわらず勝手に戦局を拡大してゆき、そのたびに陸軍大臣が閣議に弁解的な報告をしていた歴史を思い出す。戦時には、とかく現地軍が独走しがちである。¹⁹

つまり、世論がベトナムと日本とを重ねがちだったのに対し、清張自身はアメリカと日本とをアナロジカルに語っていたのである。太平洋戦争とベトナム戦争とを相似形として捉える点は、世論、また、太平洋戦争を経験した世代と清張とは同様だが、その視点の内実は異なるのである。

松本清張のベトナム戦争、あるいはインドシナ地域に対する興味は、あくまでアメリカへの興味に基づくように見えるかもしれない。彼が開高健のように戦場の悲惨を描かないのは、開高と異なり戦場に行かなかったからだという実地的な理由によるのではない、と。しかし、清張は確実に「戦争」そのものを見ようとしていたのではないか。そこには、「象の白い脚」の「象」にもダブルミーニングの可能性があるように、いずれが加害者か、被害者かという二項対立を簡単には作らず、かといってアメリカの謀略のみを抽出するのではなく、戦争状態にある人の動きを丹念に捉えようとする視線が存在するのである。そのことは、「象の白い脚」というテキスト自体が指し示している。

六 まとめ

ベトナム戦争と日本との関係について、川村湊は次のように述べている。

おそらく戦後の日本人がベトナムに関わるようなはつきりとした根拠は、政治的、経済的な意味においてはあまりなかったはずだ。むしろ、かつて日本軍によって被害を受けた国という関わりはあるのだが、それはインドシナ各国、東南アジア諸国と同じであり、日本にとってこれらの国とは異なった特別の関係も交渉もありえなかったはずである。日本とベトナムとが、特別の関係になる

としたら(少なくとも日本人の側でそう思い込むことは)、それは「アメリカの影」の下に、両者が立場こそ違え立っているということであるだろう。²⁰

つまり、アメリカを媒介として日本とベトナムとを重ねる想像力の在りようである。しかし、松本清張においては「五」で確認したように、むしろアメリカと日本を重ねる視線が存在する。

ここで改めて、「松本清張はなぜラオスを書いたのか」と問う場合、綾目広治は「アメリカにとって一九六〇年代のラオスは、被占領時代の日本と言わば地政学的に似た位置にあったのである」と述べている。ラオスと被占領下の日本とが重なるという指摘は、たしかに、アメリカにとり、政治的な側面ではそうだっただろう。しかし、清張においてはどうか。

また、「象の白い脚」は「当時のアメリカ極東戦略が東南アジアに齎したものを、ラオスを通して描いた小説」、「ラオスの黒い霧」、あるいは「日本の黒い霧」ならぬ「インドシナ戦争の黒い霧」の原型を小説の形で解明、暴露してみせた。(中略)これはフィクションのスタイルで書かれたドキュメントである」と評されている。しかし、もちろん「象の白い脚」はノンフィクションではない。その虚構性は、二人の女性の背後に清張が仄見えさせた、「言語の在りようを通じて(戦争状態)を表象する」という方法に表れている。清張の現代社会、国際社会に対する視線の広さと深さが存分に発揮された作品なのである。そして重要なことは、戦争は決して終わらないということが、人間の動きを通じて描き出されていることだ。

清張の人間への興味は、次のエッセイの記述からも窺えるだろう。ここには、清張のラオス観が示されているが、それが人間そのものを通して捉えられていることが特徴的である。

私は今度の旅でカンボジア人、ベトナム人を観察することができたが、各人の評価においてラオス人はカンボジア人に譲り、カンボジア人はベトナム人に譲っている。それほどインドシナ半島ではベトナム人の素質は優秀だといわれている。その上、ピエンチャンには華僑が財力を持ち、また隣国のタイ人も割りこんできて、ラオス人は本国でこれらの異人種に圧迫されている。²⁴

ここで想起されるのが、西谷修の議論である。西谷は「戦争論」の中で、核兵器の登場が「戦争をある意味で不可能にしまった」と述べ、核兵器の存在によって担保される「平和」は「戦争が封じ手になり、「破滅」の恐怖によって維持された「抑止」による平和」だとした。²⁵すなわち、第二次世界大戦の(終結)以後の世界は、(戦争)が普遍化、偏在化した世界だということである。一方で、清張は核兵器の存在に焦点化してはいないものの、西谷とは異なる形で新しい(戦争)の形を見抜いていた。それが、「象の白い脚」で言語化された、過去との連関と、近代国家の枠組を超えた人間の動きという視座から捉えられる(戦争状態)である。この点で、清張は西谷とは異なるものの、(戦争)が普遍化、偏在化していることを捉えていたのである。

また、如上の視座に立てば、次の西谷の記述は清張の見解とは相容れないものとなる。

戦争が世界化したのはけっして偶然のなりゆきからではなく、世界がそれを不可避にするような条件をもつようになった——それが技術の発展による交通手段の進化や、世界市場の形成、そしてそれと国民国家との矛

盾からであれ、あるいはそれらの条件をベースにしたもつと広範な人間世界の存在条件によってであれ——からである。そして消耗戦として終わった第一次世界大戦がすでに次の対戦を準備し、この二つの世界大戦が不可避的な二重の津波のようにして起こったことが示しているように、ひとたびその条件が発動して以後は、戦争とは、基本的に「世界戦争」でしかありえないのだ。だからその後も起る地域的な武力抗争は、個々の場合が「朝鮮戦争」とか「ベトナム戦争」とか呼ばれるにしても、一般概念としては「地域紛争」や「民族抗争」に格下げされることになる。²⁶

ここで西谷はベトナム戦争を「地域紛争」、「民族抗争」としているが、清張はこうした「格下げ」を行っていない。補足すれば、ベトナム戦争をアメリカ対ソ連（中国）の代理戦争として構造化しているわけではない。

それでは、清張はベトナム戦争に「何を見ていたのだろうか。そして今一度問うならば、なぜラオスを虚構化したのだろうか。それは、開高健の認識と重なるところがあるのかもしれない。開高は「輝ける闇」というタイトルの由来を次のように語っている。

四月にだした本には「輝ける闇」という題をつけたが、これはハイデッガーから借りたのである。ある日、一人の友人に作品のテーマを説明して、もしうまくいったらこういう感覚を表現してみたいのだといった。何でも見えるが何にも見えないようでもある。すべてがわかっていながら何にもわかっていないようでもある。いつさいが完備しながらすべてがまやかしのようでもある。何でもあるが何にもないようでもある。

友人はウイスキーのグラスをおき、それはハイデッガーだといった。ハ

イデッガーにその観念がある。彼は現代をそういう時代だと考えた。それを「輝ける闇」と呼んでいる、と教えてくれた。たしか梶井基次郎の作品のどこかには「絢爛たる闇」という言葉があったような気がする。どちらをとろうか。しばらく迷ってから私は「輝ける闇」として、家にこもり、書きおろしの仕事をすすめた。²⁷

「何でも見えるが何にも見えない」という感覚は、「象の白い脚」にも通底する。先にも述べたが、石田や山本の死の真相、平尾正子の正体やシモーヌの過去、なぜ谷口が発狂したかという、物語の要諦を成す諸相は、雄弁に語られているように見えて、実は真相が何一つ言明されていない。まさに「何でも見えるが何にも見えない」状態が、小説を通して差し出されているのだ。開高は「何でも見えるが何にも見えない」ことを、主体の問題として書いた。一方で、清張は状況の問題として書いたのである。

また、「象の白い脚」には次のようにも書かれている。

谷口は椅子に坐つて煙草を喫い、しばらくはんやりとした。まだ、ラオスに來たという実感がなかった。異った世界に急に連れてこられたように、気持がなじめない。パンコックの雰囲気は享楽面から入りやすく、各ホテルには各人が溢れ、街は観光客がのし歩いている。日本の商社も多く、娯楽機関にはこと欠かないので、感情の共通性が明快である。だが、このピエンチャンは未発達な町というだけでなく、空港から通ってきた印象だけが、どこか咲き損ねの陰花植物のような感じがする。それも毒々しい花ではなく、日陰にある色のない感じである。その輪郭に見当がつかないのが、
気持にとけこめない主な理由かもしれない。²⁸

ラオスという場の「輪郭に見当がつかない」とままた、「何でも見えるが何にも見えない」という現代的な状況を示している。「象の白い脚」は清張版・輝ける闇(この場合はハイデガーの用語としてであると同時に、ベトナム戦争を表象した点で開高の『輝ける闇』とも重なる)だったと言えるのである。

〈注〉

1 トーマス・R・H・ハイブズ／吉川勇一訳『海の向こうの火事 ベトナム戦争と日本 1965-1975』筑摩書房、一九九〇年七月 pp.13-14

2 出典は注1に同じ° pp.335-336

3 出典は注1に同じ° p.337

4 小熊英二『1968(上) 若者たちの叛乱とその背景』新曜社、二〇〇九年七月、p.68

5 小田実『「平連」・回顧録でない回顧(上)』第三書館、一九九五年一月 pp.53-54

6 引用は注5に同じ° pp.24-25

7 引用は注5に同じ° p.51

8 『平連事務局連絡速報—No.1、66.4.6』(引用はベトナムに平和を! 市民連合編『資料・「平連」運動 上巻』河出書房新社、一九七四年六月、p.69に引く。)

9 『松本清張と東アジア——描かれた東アジア・東南アジア』読まれる清張(北九州市立松本清張記念館、二〇一〇年十二月一日)参照。

10 B.コヴァツチ、T.ローゼンステイル／加藤岳文、斎藤邦泰訳『ジャーナリ

ズムの原則』日本経済評論社、二〇一二年十二月二十日

11 ノーム・チョムスキー、アンドレ・ヴルチェク／本橋哲也訳『チョムスキーが語る戦争のからくり——ヒロシマからドローン兵器の時代まで』平凡社、二〇一五年六月十日、pp.61-63

12 引用は『松本清張事典増補版』(執筆・横井司)による。

13 この記述の他にも、谷口の言語運用能力がラオスにおいて不足していることを示す箇所は複数認められる。例えば、①「あなたは日本人だね?」／と、シモー又は愛想笑いをして云った。谷口が、フランス語はできないから英語で願いたいと云うと、彼女はうなずいて云い直した(p.266)、あるいは②「今日は、ムツシュ」／と、思いがけなく老婆の口から流暢なフランス語がとび出した。／「お気の毒ですが、ムツシュ山本は昨夜からわたしの家には帰っておられません」／「メルシー・マダム」／と谷口はたじたとになりながらおぼつかないフランス語で答えた。不意を衝かれたので、よけいに文法が乱れた(p.272)、③ひとりではラオス語もタイ語も話せないから外出しても面白くなかった(p.274)といった箇所が挙げられる。

14 この表現は杉原からシモーヌのみに向けられたものだが、平尾正子の境遇が谷口の推理通りであるならば、彼女も同様の存在だと言える。

15 綾目広治『松本清張 戦後社会・世界・天皇制』(御茶の水書房、二〇一四年一月) p.175

16 松本清張『ハノイで見たこと 北ベトナム報告と日記』朝日新聞社、一九六八年八月、p.19

17 稿者による北九州市立松本清張記念館での調査は、二〇一五年三月十日から十二日にかけて行われた。『象の白い脚』原稿(一部)、ゲラ(一部)の他、旧蔵書やベトナム戦争に関わる可能性のある諸資料の閲覧が許された。

18 松本清張／エドガー・スノー「独占対談」中国と北ベトナムはどう出るか
〔潮〕一九六八年六月

19 松本清張「ハノイで見たこと」北ベトナム報告と日記「朝日新聞社、一九六八年八月」p.126

20 川村湊「ベトナム・トライアングル——日本の文学者たちのベトナム戦争」
〔現代詩手帖〕一九八八年四月)p.45

21 綾目広治「松本清張 戦後社会・世界・天皇制」(御茶の水書房、二〇一四年
十一月)p.174

22 綾目広治「松本清張 戦後社会・世界・天皇制」(御茶の水書房、二〇一四年
十一月)p.177

23 原寿雄「解説」〔象の白く脚〕文春文庫、一九七四年六月)p.346-347

24 松本清張「ハノイに入るまで」「ハノイで見たこと——北ベトナム報告と日
記」朝日新聞社、一九六八年八月二十日、pp.238-239

25 西谷修「戦争論」(講談社学術文庫版、一九九八年八月。初出は『死』(岩波書店、
一九九一年)pp.24-25)

26 西谷修「戦争論」(講談社学術文庫版、一九九八年八月。初出は『死』(岩波書店、
一九九一年)pp.27-28)

27 開高健「南の墓標」〔産経新聞〕一九七三年十一月二十二日(夕刊)

28 〔象の白く脚〕p.188

参考資料1 松本清張とベトナム戦争 関連文献

一九六六(昭和四十一年)
五月九日「ベトナム反戦広告の『七人の侍』」〔週刊文春〕

一九六七(昭和四十二年)

七月六日「首相の南ベトナム訪問／反対和平寄与は疑問／派兵につながる恐
れ」〔朝日新聞〕

十月十六日「戦争の足音／東風西風」〔読売新聞〕(夕刊)

一九六八(昭和四十三年)

一月一日「アンケート日本の平和をどう守る／日本の安全保障識者一〇〇人に
きく」〔読売新聞〕

一月二十九日「政府の声明を！／東風西風」〔読売新聞〕(夕刊)

三月「キューバ・佐世保・ベトナム」〔文藝春秋〕

三月二十二日「落ち着いた市民生活／ハノイ到着の松本清張氏語る」〔赤旗〕

三月二十七日「テト攻勢どう評価／解放戦線ハノイ代表チエン氏と一問一答」
〔朝日新聞〕

四月五日～六月七日「松本清張の北ベトナム報告／ハノイからの報告」〔週刊
朝日〕

四月六日「米軍引き上げを着たベトナム首相が強調／松本清張氏と会見」〔朝
日新聞〕

四月七日「和平、市民は静観／松本清張氏語る」〔朝日新聞〕

四月八日「北ベトナムの表情松本清張氏語る／勝ちぬく静かな自信」〔赤旗〕

- 四月十二日「グラビア／松本清張氏戦火のハノイをゆく」〔週刊朝日〕
- 四月十五日「平和と話し合い／東風西風」〔読売新聞〕夕刊
- 四月十六日「ハノイはどう考えているか」〔赤旗〕
- 四月十九日「ファンバンドン北ベトナム首相と単独会見」〔週刊朝日〕
- 四月二十日「北」からのメモ／奥地の少数民族を訪れる」〔週刊朝日〕〔緊急増刊〕
- 四月二十一日～六月二日「北ベトナム日記／ハノイ日記」〔赤旗〕〔日曜版〕
- 四月二十二日「政治のサボ／東風西風」〔読売新聞〕夕刊
- 四月二十二日「松本清張のハノイ報告」〔週刊文春〕
- 五月四日「平和のエスカレート／バリ会談を歓迎ムードに酔うな」〔毎日新聞〕〔夕刊〕
- 六月「中国と北ベトナムはどう出るか」〔潮〕
- 六月「北ベトナムへの遠い道」〔宝石〕
- 六月六日「わが政治的宣言」〔東京新聞〕夕刊
- 八月二十日「ハノイで見たこと——北ベトナム報告と日記」〔朝日新聞〕
- 八月「ハノイで見たこと」
- 一九六九（昭和四十四）年
- 六月八日「メコン川のほとりで」〔北海タイムス〕
- 六月二十二日「グラビア／推理作家ラオスを行く『アジアの火薬庫』を取材する松本清張氏」〔週刊文春〕
- 八月～七〇年八月「象と蟻」〔象の白い脚〕〔別冊文藝春秋〕一〇九～一一三
- 九月十四日「ホーチミンが死んだ／ひと静に」〔京都新聞〕夕刊
- 九月十四日「ホーチミンの死」〔北海タイムス〕
- 九月十九日「幻の謀略機関をさぐる」〔週刊朝日〕
- 十二月二日「幻の謀略機関をさぐる」〔週刊朝日〕
- 一九七二（昭和四十六）年
- 七月「激動するアジアを見つめて／対談／ウィルフレット・G・パーチエット」〔文藝春秋〕第四九卷第九号
- 一九七二（昭和四十七）年
- 六月八日「ベトナム情勢と私」〔赤旗〕
- 八月十日「北爆下のハノイ／対談／コンツムハノイ総合大学長」〔朝日新聞〕
- 一九七三（昭和四十八）年
- 一月二十四日「ベトナム和平に思う／敢然解決とはいえない」〔朝日新聞〕夕刊
- 一月二十六日「わが内なるベトナム／不屈の精神を学ぶ」〔読売新聞〕夕刊
- 二月「文壇の社会派大いに語る／対談／石川達三」〔オール読物〕
- 九月二十二日「北ベトナムと国交樹立／沖縄の米機発進やめさせよ」〔朝日新聞〕
- 十二月二十～二十五日「北ベトナム古代文化の旅」〔朝日新聞〕夕刊
- 一九七四（昭和四十九）年
- 一月二十～二十六日「ハノイ再訪」〔赤旗〕
- 二月十五日「下駄でつながるムオン族／座談会」〔朝日ジャーナル〕
- 五・六・八月「トンニヤット・ホテルの客」〔野生時代〕

一九七七(昭和五十二年)

二月、八〇年九月「眩人」(『中央公論』)

九月二日「ベトナム独立記念日」ベトナム人たちと文化の提携へ、松本清張

(『朝日新聞』)

【参考資料2】

松本清張とベトナム戦争 年表

一九六四(昭和三十九)年

八月二日 トンキン湾事件。

八月四日 アメリカ、報復に北ベトナム海軍基地を爆撃。

八月十一日 池田内閣閣議、南ベトナムへの第一次緊急援助として医薬品等五

〇万ドルを決定。

九月二十三日 横須賀で七万人の米原子力潜水艦寄港反対集会、佐世保でも一

万人の集会。

十月十日 東京オリンピック開催。

十月二十七日 南ベトナムへの第二次緊急援助一〇〇万ドル決定。

十一月九日 佐藤内閣成立。

十一月十五日 開高健、ベトナムへ取材に出発。

一九六五(昭和四十)年

一月一日 開高健「南ベトナム報告」を『週刊朝日』に連載開始(〜三月五日)。

【清張】四月十五日、五月五日 中東に取材旅行。この時機上でパリに行く女優の

新珠三千代と乗り合わせ、後日ゴシップ誌に書かれる。娘一家がパリに

発つ。

四月二十日 大内兵衛ら九二人、首相にベトナム和平について申し入れ。

四月二十四日 ベ平連、初のデモ行進。

五月二十二日 ベ平連、米「ベトナムの日委員会」と連携して二回目のデモ。

六月二十一日 「ベトナム侵略に反対する音楽家・舞踏家の集い」五〇〇人参加。

加。

七月十四日 「第一回ベトナム侵略に反対する大音楽界」(日比谷公会堂)一二五

〇〇人参加。

七月十九日 米B52爆撃機三〇機、沖縄を発進してサイゴン南東を爆撃。

【清張】八、十月 「昭和史発掘」で「潤一郎と春夫」を掲載。

八月十四日 ベ平連、徹夜ティーチイン。

八月十九日 佐藤首相、沖縄訪問、デモに包囲され、米軍基地内に宿泊。

九月二十五日 ベ平連、定例デモを開始。

十月五日 ライシャワー米大使、日本の新聞のベトナム報道は偏向と批判、問

題化。

十月十五日 米国で「ヴェトナム戦争終結のための全米調整委員会」が全米各

都市でデモを組織。米国内のヴェトナム反戦運動がはじまる。

十月二十三日 「ベ平連ニュース」創刊。

十一月十六日 ベ平連、「ニューヨークタイムズ」に反戦意見広告。

一九六六(昭和四十一年)

【清張】二月一日 次男昭結婚。半年後書店を開店。

五月三十一日 椎名外相、ベトナム作戦への施設供与は義務と答弁（参院外務委）。

七月十七日 ホー・チ・ミン北ベトナム大統領、徹底抗戦を訴える。

十月十五日 ペ平連、サルトル、ボーヴォワールとの集会。

【清張】十一月下旬 夫人が独りで娘のいるバリへ一ヶ月旅行。

【清張】十二月 「砂漠の塩」が第五回婦人公論読者賞受賞。

ベトナム反戦広告募集（ワシントン・ポスト紙、一九六七年四月三日）の呼びかけ人の一人となる。

【清張】*この年から古代史関係の作品を発表しはじめる。

一九六七（昭和四十二年）

一月二十五日 ペ平連、米歌手ジョーン・バエズとの集会（二十七H、NTVの録画中継では通訳の内容で、CIAの介入によると問題化）。

【清張】三月七日 「昭和史発掘」「花水」「逃亡」等の作品と幅広い作家活動に対して第一回古川英治文学賞を受賞。

三月十日 北爆拡大、北ベトナムのタイグエン重工業地帯を爆撃。

四月三日 ペ平連、「ワシントンポスト」に反戦広告掲載。

【清張】四月十一日 古川英治文学賞授賞式。

【清張】四月 文藝家協会理事に再任、以後死去するまで留任。

【清張】八月 山本健吉の批評に対し「読売新聞」紙上で反論。

八月八日 新宿駅構内で米軍のタンクローリー車と貨車が衝突、炎上。

九月二十日 佐藤首相、東南アジア訪問（二十三日）。

【清張】秋ごろ胃潰瘍となる。仕事の量を減らす。この頃英会話の家庭教師を雇い学ぶ。

十月八日 佐藤首相、南ベトナムなど訪問に出発。羽田で阻止の学生、反戦青年委と機動隊が衝突、京大生一名死亡。

【清張】十月二十一日 長男陽一結婚。

十月十六日「戦争の足音／東風西風」（「読売新聞」夕刊）。

十月十六日 佐藤首相、ニュージーランドで「ベトナムの平和は北側の意志次第」と語る。

十月二十一日 米ワシントンで大デモ。その他世界各地で反戦集会、デモなど多数。

十一月十一日 由比忠之進、首相官邸前で日本の北爆支持に抗議して焼身自殺。

十一月十三日 ペ平連、イントレピッド号からの4水兵脱走について記者会見で発表。

十一月十五日 ワシントンで日米共同声明、日本政府は米のベトナム政策を支持。

【清張】十二月三十一日 出国。一月のキューバ政府主催の「世界文化会議」に出席のため。カストロやゲバラ夫人とのインタビューを試みるが失敗。

【清張】*江戸川乱歩賞選考委員となる（一九七五年まで）。

一九六八（昭和四十三年）

一月三日 ジョンソン大統領特使ロストウ国務次官、佐藤首相と会談。ドル防衛に協力、東南アジア経済援助の大幅増額を要請。

【清張】一月十五日 帰国。旅行中ベトナム民主共和国対外文化連絡委員会から招待状が届く。

一月十九日 米原子力空母エンタープライズ、佐世保に入港。激しい反対行動。
一月三十日 北・解放戦線が旧正月（テト）攻勢開始、南部主要都市を一斉攻撃。

【清張】二月二十日 北ベトナムの視察旅行に出発。天候不順のため二十四日間
ラオスで足止めされる。

【清張】三月十九日 ハノイ着。

三月三十一日 ジョンソン大統領、大統領選不出馬、北爆の一方的停止の演説
と大統領選不出馬を声明。

四月三日 北ベトナムが「北爆の無条件停止を確認のため米国と予備的に接触
する」と発表、ジョンソン大統領、これを受諾。

【清張】四月四日 ファン・バン・ドン首相と単独会見に成功。

【清張】四月九日 帰国。

【清張】四月 来日中のエドガー・スノウと対談(「潮」六月号)。

五月七日 ベ平連、沖縄等で脱走した米兵の人の国外脱出について記者会見で
発表。

五月十三日 米・北ベトナム間のパリ会談の実質討議始まる。

【清張】六月九日 専属の速記者福岡が辞める。

【清張】七月一日 十二指腸穿孔に腹膜炎を併発、東京女子医大病院に入院。

八月十一日 ベ平連、京都で「反戦と変革に関する国際会議」開催(十三日)。

【清張】十月十七日 オランダ、ベルギー、イギリスに出発。

十月二十一日 国際反戦デー、新宿では学生らが機動隊と衝突、騒乱罪が適用
される。

【清張】十一月五日 帰国。

十一月六日 米大統領選挙、ニクソン当選。

一九六九(昭和四十四)年

【清張】*カッパ・ノベルスの著書売り上げが総計一千万部突破。

一月十八日 東大安田講堂闘争(十九日)。

一月二十五日 第一回ベトナム和平の拡大パリ会議、実質討議に入る。

二月二十八日 ベ平連の東京フォーク・ゲリラ、新宿西口地下広場で初の集会

五月十七日 土曜日の新宿西口フォーク集會に機動隊が初出動、群集一〇〇〇
人が集まる。

【清張】五月十八〜二十四日 「象と蟻」の取材旅行のためラオスに行く。

五月三十一日 新宿西口のフォーク集會、五〇〇〇人の大集會となる。

七月八日 米軍撤退第一陣八一四名サイゴン出發、米本土へ。

七月二十六日 機動隊二〇〇〇人が新宿西口広場に出動、フォーク集會を規
制、以後不可能となる。

九月二日 ホー・チ・ミンベトナム民主共和国大統領死去。

十一月十五日 ワシントンで反戦デモ、三〇万人、小田実も参加。

十一月十六日 米「ニューヨーク・タイムズ」紙、ソンミ村虐殺事件(六八年三
月)を報道。「全米反戦デー」連帯・佐藤訪米反対市民集會「一五〇〇〇人参加、銀
座をデモ。蒲田周辺では学生と機動隊の衝突。

十一月十七日 佐藤首相訪米に出發。「週刊アンボ」創刊。

十一月二十一日 佐藤ニクソン會談、共同聲明發表(安保条約堅持、韓国と台湾
の安全重視、日本の核政策尊重、沖縄の七二年返還など)。

十二月一日 米「ライフ」誌、ソンミ虐殺のカラー写真を掲載。

【清張】十二月三十日 妻子とともに年末年始を東南アジア旅行で楽しむ。

一九七〇(昭和四十五年)

二月二十一日 北ベトナム軍とパテトラオ軍、ラオスのジャール平原を制圧。

六月二十三日 日米安保条約、自動延長となる。全国で反安保デモ。

【清張】十月十二日 「昭和史発掘」を軸とする意欲的な創作活動により第十八回 菊池寛賞受賞。

【清張】十一月五日 授賞式。

一九七二(昭和四十六)年

【清張】四月 『松本清張全集』第一期至三十八巻の刊行始まる。

【清張】六月 「留守宅の事件」が読者投票による第三回小説現代ゴールデン読

者賞(一九七一年上半期)受賞。

【清張】九月 大江健三郎らと「司法の独立と民主主義を守る国民連絡会」を結成。

【清張】*この年日本推理作家協会会長に就任。二期四年間務める。

一九七二(昭和四十七)年

【清張】三、七月 戯曲「日本改造法案」が劇団民芸により村山知義演出で各地で公演。

【清張】十月 若い研究者の発表の場として『季刊現代史』創刊。

【清張】十一月 日本ペンクラブ執行部と国際会議開催をめぐり衝突。

一九七三(昭和四十八)年

一月十五日 ニクソン、北ヴェトナムへの爆撃、砲撃、機雷敷設の停止を命令。

一月十八日 第一七四回パリ会談(最終回)。

一月二十三日 キッシンジャー、レ・ドク・ト、和平協定案に仮調印。

一月二十八日 ベトナム停戦協定発効。

二月二十二日 ラオス停戦協定発効。

【清張】二月 日本ペンクラブ退会。

三月二十九日 米軍、南ベトナムからの撤退完了(顧問七六〇〇人は残留)。

【清張】四月十四日 イラン、トルコ、オランダ、イギリス、アイルランド取材旅行。

【清張】五月五日 帰国。

【清張】七月 ハノイ大学の学長と対談。

【清張】十一月二日 三男隆晴結婚。

【清張】十一月十九日 ベトナム民主共和国の招待でベトナム古代文化視察団の団長として北ベトナム訪問。団員に江上波夫、大林太良、浅見善吉。

【清張】十二月八日 帰国。

一九七六(昭和五十二)年

六月二十四日 ベトナム社会主義共和国樹立(ファン・バン・ドン首相)。

参考文献一覧

【松本清張関連】

松本清張／エドガー・スノー「独占対談」中国と北ベトナムはどう出るか

(「潮」一九六八年六月)

松本清張「ハノイで見たこと」——北ベトナム報告と日記「朝日新聞社、一九六八年八月二十日

『別冊文藝春秋』一九六九年八月〜七〇年八月

『国文学』一九七三年六月

『象の白い脚』文春文庫、一九七四年六月二十五日

『松本清張全集』二二、文藝春秋、一九七三年八月二十日

『松本清張全集』三二、文藝春秋、一九七三年十二月二十日

『松本清張全集』三四、文藝春秋、一九七四年二月二十日

『松本清張全集』六五、文藝春秋、一九九六年二月二十九日

『長編小説 象の白い脚』光文社、一九七五年七月二十五日

『国文学』一九七八年六月

藤井康栄『松本清張の残像』文藝春秋、二〇〇二年十二月二十日

岩見幸志『松本清張書誌研究文献目録』勉誠出版、二〇〇四年十月十五日

『松本清張研究 2008 第九号』北九州市立松本清張記念館、二〇〇八年三月三十一日

歴史と文学の会、志村有弘『松本清張事典』勉誠出版、二〇〇八年五月十日

『松本清張と東アジア——描かれたへ東アジア・東南アジアへ読まれるへ清張』

北九州市立松本清張記念館、二〇一〇年十二月一日

『松本清張研究 2011 第十二号』北九州市立松本清張記念館、二〇一一年三月三十一日

綾目広治『松本清張——戦後社会・世界・天皇制』御茶の水書房、二〇一四年十一月三十日

【ベトナム戦争関連】

岡村昭彦『続ヴェトナム戦争従軍記』岩波書店、一九六六年九月二十日

坂本徳松『東南アジア 新しい理解のために』社会思想社、一九六七年四月十五日

ハリソン・E・ソールズベリ／朝日新聞外報部訳『ハノイは燃えている』朝日新聞社、一九六七年四月二十五日

吉沢南『ベトナム戦争と日本』岩波書店、一九八八年七月二十日

トーマス・R・H・ヘイブンス／吉川勇一訳『海の方の火事 ベトナム戦争と日本 1965-1975』筑摩書房、一九九〇年七月

古田元夫『ベトナムの世界史 中華世界から東南アジア世界へ』東京大学出版会、一九九五年九月二日

西谷修『戦争論』講談社学術文庫、一九九八年八月十日

B・コヴァッチ、T・ローゼンステイル／加藤岳文、斎藤邦泰訳『ジャーナリズムの原則』日本経済評論社、二〇〇二年十二月二十日

岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編著『戦後日本スタディーズ ② 60・70年代』紀伊國屋書店、二〇〇九年五月三十日

小熊英二『1968(上) 若者たちの叛乱とその背景』新曜社、二〇〇九年七月七日

小熊英二『1968(下) 叛乱の終焉とその遺産』新曜社、二〇〇九年七月三十一日

D・ハルバースタム／浅野輔訳『ベスト&ブライテスト(上) 栄光と興奮に憑かれて』二玄社、二〇〇九年十二月十五日

D・ハルバースタム／浅野輔訳『ベスト&ブライテスト(中) ベトナムに沈む星条旗』二玄社、二〇〇九年十二月十五日

D・ハルバースタム／浅野輔訳『ベスト&ブライテスト(下) アメリカが目覚め

た日」二玄社、二〇〇九年十二月十五日

『岩波講座東アジア近現代通史第8巻 ベトナム戦争の時代 1960-1975年』

岩波書店、二〇一一年六月二十八日

『コレクション 戦争と文学 2 ベトナム戦争』集英社、二〇一二年四月十日

『コレクション 戦争と文学 別巻 戦争と文学』案内』集英社、二〇一三年九月

三十日

マグヌス・ヒルシュフェルト／高山洋吉訳『戦争と性』明月堂書店、二〇一四年

六月十五日

ベトナム反戦直接行動委員会編『死の商人への挑戦 1966／ベトナム反戦直

接行動委員会の闘い』アナキズム叢書』刊行会、二〇一四年十二月二十日

ノーム・チョムスキー、アンドレ・ウルチエク／本橋哲也訳『チョムスキーが

語る戦争のからくり——ヒロシマからドローン兵器の時代まで』平凡社、二〇

一五年六月十日

川村湊『ベトナム・トライアングル——日本の文学者たちのベトナム戦争』現

代詩手帖』一九八八年四月一日

宋仁善『ベトナム戦争の現実と架空——大江健三郎「生け贄男は必要か」——』

『日本文学』第五五巻第九号、二〇〇六年九月

【小田実・開高健関連】

小田実『義務としての旅』一九六七年九月二十日

ベトナムに平和を！ 市民連合編『資料・「ベ平連」運動 上巻』河出書房新社、

一九七四年六月

『小田実全集Ⅲ期 評論第19巻 「ベ平連」・回顧録でない回顧(上)』講談社、

二〇一二年九月二十五日

『小田実全集Ⅲ期 評論第20巻 「ベ平連」・回顧録でない回顧(下)』講談社、

二〇一二年九月二十五日

開高健『輝ける闇』新潮文庫、一九八二年七月二十五日

開高健『ベトナム戦記』朝日文庫、一九九〇年十月二十日

開高健『開高健の文学論』中央公論新社、二〇一〇年六月二十五日

谷沢永一『輝ける闇の私』(『国文学』一九七五年十一月)

島田昭男『開高健『輝ける闇』(『解釈と鑑賞』一九七七年九月)

鷲田小弥太『人間・この闘うもの 「輝ける闇」』(『国文学』一九八二年十一月)

殿岡昭郎『観察者の批評性 ベトナム戦争より』(『国文学』一九八二年十一月)

関伊佐雄『開高健論 「ヴェトナム戦記」から『輝ける闇』への歩み』(『主潮』一九

八四年十二月)

日野啓三、向井敏(『特別対談』開高文学の「輝ける闇」)、『文学界』一九九〇年

二月)

関川夏央『ただ家にいたくなかった作家——『輝ける闇』開高健』(『図書』二〇〇

〇年九月)

若木俊一郎『開高健『輝ける闇』(『私小説研究』二〇〇六年三月)

杵淵博樹『ジャーナリストの戦場と「女」——ニコラス・ボルン』捏造』と開高健

『輝ける闇』夏の闇』(『比較文学年誌』二〇一二年三月)

牧野十寸穂『開高健『輝ける闇』——蘭草と泥』(『群系』二〇一二年七月)

第16回 松本清張研究奨励事業報告書

発行日 平成二十八(二〇一六)年二月二十九日発行

〔編集・発行〕

北九州市立松本清張記念館

北九州市小倉北区城内二―三

電話(〇九三)五八二―二七六一

〔印刷・製作〕

有限会社シーズ

本報告書掲載の本文及び資料の無断転載・複写を禁じます。
松本清張記念館ホームページ <http://www.kidn.jp/seicho>
登録番号 北九州市印刷物登録番号1508113A

松本清張研究奨励事業

第19回

募集要項

一、趣 旨

時代を見つめ続けた清張文学を研究することは、今後の時代の進むべき方向性と私たちの生きていく指針を見いだすことにもつながります。このような視点から、清張の作品や人物についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の深層を探究する精神を継承していくため、松本清張夫人ナヲ様のご厚意により創設しました。

二、対 象

ジャンルを問わず、松本清張の作品や人物を研究する活動や、松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)で、これから行うとされるもの。年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限りません。個人又は団体も可。

三、内 容

入選者(団体)に二二〇万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。

四、応募方法

今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書・予算書・参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成二十九年三月三十一日までに応募してください。

五、選 考

松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

六、発 表

審査終了後、審査結果を直接通知します(六月末頃)。なお、入選者には八月に、北九州市で贈呈式を行います。

七、その他

採用された企画は翌年の六月末日までに実施成果を報告していただきます。また、成果品である研究論文、報告書等は記念館が刊行予定の研究誌に掲載することがあります。成果品に係る著作権等諸権利は、北九州市に帰属します。

八、応募先

〒八〇三一〇八二三 北九州市小倉北区内(一番三号)
TEL〇九三(五八二)二七六一 FAX〇九三(五六二)三三〇三

北九州市立 松本清張記念館